

言語能力を統合して解決する問題②（全学年を総括して）

報告者 田中大介

1 各学年の分析から見る成果

概要にある通り、本調査は教科横断的な「言語能力」を総合的に見る問題であり、その内容は、①情報を読み取る力（問題1） ②情報を比較し、読み取る力（問題2） ③読み取った情報を基に自分の意見を表現する力（問題3） ④仮説を立てる力（問題4） の4つの力を評価する問題の構成となっている。各学年の調査結果及び考察から、成果（伸びが見られた児童及び報告者が必要だと感じること）を抽出すると、表1のようになった。

表1 各学年の調査結果及び考察から抽出した成果

学年	伸びが見られた児童及び報告者が必要だと感じていること
第1学年	<ul style="list-style-type: none"> 文章を書くことが好きになること 題意を理解すること 自己の考えをまとめること 自己の考えをノートに書くこと 生活科における気付きが増えること
第2学年	<ul style="list-style-type: none"> 文章と挿絵を比較すること 自己の気持ちを正確に記述すること 題意を理解すること 国語科において文章を書くこと 算数科で自分の考えを図で表すこと 生活科における気付きが増えること 様々な学習を生かしていると実感すること
第3学年	<ul style="list-style-type: none"> 題意を理解すること 資料を比較すること 鯨っ子学習（総合的な学習の時間における個人探究）において疑問や課題を解決すること 鯨っ子学習において試行錯誤すること
第4学年	<ul style="list-style-type: none"> 算数科で表やグラフを使って分かりやすくすること 言葉の強調や言い換えに着目すること 読み取った情報を正しくとらえること 読み取った情報を解釈して表現すること 鯨っ子学習において「整理・分析」や「まとめ・表現」などの取り組む視点を意識すること
第5学年	<ul style="list-style-type: none"> 資料を使って思いや考えを論理的に伝えること 題意を理解すること 何とか答えを記述しようとする
第6学年	<ul style="list-style-type: none"> 資料を読み取って、的確に答えること 読書量によって読み取る力を高めること すみずみまで読むこと 資料の大切なところを考えること 知識が増えることでできるようになること 何が必要かを考え、端的に書くこと（鯨っ子学習や作文指導を通して）

2 考察

(1) 情報を読み取る力（問題1）について

この力は読解力の側面に関わるものである。問題を解くにあたって必要なものとして「題意を理解する」というものがある。問題1において向上の見られた第1・5年生について「題意を理解する」という旨の記述がある上、その他の学年でも同じ意味の記述が多数みられたことから、これは重要なことであると言える。題意を理解するために必要なことは、第6学年の児童の「読書量によって読み取る力を高める」「知識を増やす」「すみずみまで読む」「資料の大切なところを考える」といった発言から、「読み取るための知識を幅広く集めること」「問題をすべて読むこと」「キーワードを抽出すること」が挙げられる。これらは、各教科学習において焦点化すべき事柄であると捉えることができる。

(2) 情報を比較し、読み取る力（問題2）について

この力は読解力とともに、比較対象を作って考えるという点で創造的思考の側面にも関わるものである。第1・2学年において伸びの見られた児童は、その理由として「生活科における気付きが増えること」を挙げている。気付きが増えることはつまり、得た情報が増えることによって比較対象が出てくるということだと考えられる。その経験が比較する必然性を生み、結果として比較する力が高まっているのではないかと推測される。第3・4学年においては、問題2の正答率が下がっており、その原因として「比較対象を明確にすること」ができていなかったということが報告者により挙げられている。学習場面において何を比較するのか、明確にできるようにする必要があると考えられる。

(3) 読み取った情報を基に自分の意見を表現する力（問題3）について

この力は、創造的思考及び他者とのコミュニケーションの側面に関わるものである。表1を見ると、第1・2学年においては、自己の考えを正確に表現するための方法を学ぶ必要があると考えられる。第3・4学年においては、目的をもち、分かりやすくするために必要なことを学ぶ必要があると考えられる。第5・6学年においては、より論理的に、端的に表現するために必要なことを学ぶ必要があると考えられる。

(4) 仮説を立てる力（問題4）について

この力は、創造的思考及び他者とのコミュニケーションの側面に関わるものである。R4の調査において、全ての学年において正答率が高まった項目である。どの学年の問題も、生活経験や学習経験と問題を関連付けながら解答し、さらにその理由を記述する内容となっている。鯧っ子学習において、仮説を立てて探究活動に取り組む学習過程を設定したことが効果的であったと考えられる。

(5) 教科横断的な「言語能力」について

各学年に共通して見られる傾向として、伸びの見られた児童は問題を解く際に各教科で学んだことを自覚的に活用している点が挙げられる。特に、第1・2学年では生活科、第3～6学年においては鯧っ子学習について言及しているものが多い。さらに、第3～6学年で伸びが見られた児童の発言には、鯧っ子学習を進めていくにあたって、各教科で学んだことを生かして学びを進めていることが伺える発言が多く見られた。このことから、各教科で学んだことを生かして探究的に学びを進めることが、言語能力の向上につながると考えられる。

3 まとめと今後の展望

本調査の結果及び考察から、言語能力の育成のためには、各教科で学んだことを総合的に活用しながら行う鯧っ子学習が効果的であると言える。特に「仮説を立てる力」については高まりが顕著であり、これまでの実践の効果が伺える。

言語能力の育成に関わる具体的な取り組みについては他項に示す通りであるが、この2年間の取り組みを今後も継続して行うことが必要である。継続していく中で、各学年の発達段階に応じてどのような取り組みが最適なのか、本調査結果を基にしながら検討し続けることが重要であると考えられる。